

病室

宮城保之

待合室の長椅子の上で、男は顔を上げた。黒い大振りの柱時計が見えた。その左側には褐色の木目が目立つ戸棚がほぼ同じ高さに並んでいる。そうしてそこに左手の窓から差し込む夕陽のほのかな明かりが差し掛かり、壁に薄い影をつくる様子に、彼は今眠りから覚めたばかりの人間が持つような虚ろな眼差しを向けていた。

時計の針は五時を指している。彼は首を曲げると周囲をぐるりと見まわしてみた。向かい側の白い壁の手前に、彼が今座っているのと同じ長椅子が、ちょうど平行に三つ並んでいるのが見えたが、人が座っている様子は無い。これは明らかに奇妙なことだった。なぜなら診療終了時刻までまだ大分間があるというのに、彼以外ここに誰も見当たらないというのは、普段なら考えられないことだったからだ。

男は腕を曲げると大きく伸びをした。一体何時まで待たねばならないのだろう。こうして一人で黙って座っていると、体の所々で血の流れが止まったように感じられ、首から先にかけて無感覚になってきた。それをはらうように頭を左右に二回振り、視線を落とすと、床の片隅に何か小さい影が見えた。

一匹の百足が、10センチほどの細長い平らな体を壁に寄せてうずくまっている。二本の触角の伸びた褐色の頭部の後ろに、光沢のある黒い背中が幾つかの節に分かれ、その一つ一つに対になるように黄色い足が並び、尻の部分はちょうど頭部と同じように褐色で、触角に似た二本の細い足が斜め後ろに伸びている。ちょうど戸棚の陰に隠される位置にいたので、今までその姿に気づかなかったようだ。一体どこから入り込んできたのか見当もつかなかったが、この醜悪な生き物は病院の清潔な室内にはいかにも似つかわしくないように彼には思われた。毒を持っているのだろうか。大型の百足の中には強い毒を持った奴もいるらしい。噛まれてひどく腫れるようなことになれば厄介だろう。まさか死ぬことはあるまいが。こいつは比較的大型だし、変に刺激すると顎をかざして襲い掛かってくるかもしれない。男は静かに立ち上がると、そっと右足を上げ、好奇心と恐れ半ばに、百足の脇腹のあたりを慎重につま先で触れてみた。

すると百足は体をS字型に硬直させ、向かい側の壁にぐっと押し付けると、足と触角を小刻みに揺らめかせながら、防御とも威嚇ともされない姿勢をとった。百足の奇妙な姿勢に、まるでその細かい足の一本一本に背筋を撫でられているかのような戦慄を覚え、毒物

に触れてでもいるかのように彼は右足をとっさに引いた。男の足が離れると、百足は半ば宙に浮いていた足をぺたりと地につけ、体をゴムのようにくねらせながら戸棚の裏の隙間に素早く入り込んだ。男は膝を曲げ、腰をひねり、左手で戸棚の端をつかむと、百足の入っていった隙間を覗き込もうと頭を傾けた。

そのとき背後から、紀闇さん、と彼を呼ぶ声がした。ちょうど椅子の向こう側に白衣を着た若い女性が立っているのが見えた。彼女は右腕に分厚い書類を抱え、その間にはペンが一本はさみこまれている。

「先生が呼びです。二階までいらしてください」

彼女の声は洞窟の中での呼吸のように透明でくぐもった響きをたてた。

「二階ですって？」彼は半身のまま答えた。「診療室は二階にあるんですか？」

「診療室ではありません」と彼女は答えた。「二階の215号室です。そこで先生がお待ちですから」

彼女の単調な語り口や態度に、男は悪意のこもった冷やかさを感じた。こうした無関心で事務的な人間とは何処を訪ねても出くわすものだ。彼の中には不快感以上に諦念が起きた。結局のところ彼らにとって重要なのは双方の充足を得ようとする誠意ではなく、あくまで自分たち自身の業務の円滑な遂行なのだ。そしてこうした態度とは裏腹な人間的な心の優しさを期待することなどまず不可能なことなのだ。このような悲観的な考えを彼が抱いたのは、彼女の言動自体よりもむしろ室内の鬱屈した空気のせいかもしれない。実際彼は先ほどから、こめかみを圧迫されるような窮屈さをそこに感じていたのだ。男は左手を戸棚から離すと膝に置き、そのまま伸びをするように立ち上がった。早くも看護師は廊下へ歩き出していた。周囲の薄暗さの中で際立っていた白い影の輪郭が墨に溶かされたようにあえかに霞み始めた。彼女を見失うわけにはいけない。男はもう一度頭を左右に大きく振ると、彼女の後ろを歩き始めた。

看護師の後について階段を昇ると、男は一度足を止め、周囲をぐるりと見まわしてみた。正面にクリーム色のドアがある。左右には廊下がまっすぐに伸び、その両側の壁に目の前のものと同じドアがずらりと平行に並んでいるのが見えたが、廊下の先のほうは何処まで続いているのか彼には分らなかった。すでに右手に進んでいた看護師は、男が立ち止まっていることに気づくと歩みを止めて振り返り、まるで促すかのように、口を結びあごを少ししかけた不機嫌そうな表情で彼のほうを見やった。男はこうした長い通路の中で己の位置を確かめるように足をぐつと床に押し付け、依然視線を廊下の先に向けたまま押し黙っていた。もはや外の様子をうかがい知ることもできず、皮膚の細胞のように陸続と連なるドアを見るうちに、危うい不安な感覚が喉元の下のほうからこみあげてくるのを彼は感じ

ていたが、ただ一つ、先ほども彼を悩ませていた軽い頭痛がようやく治まりかけてきたのが救いといえば救いだった。男は彼女のほうに重々しい足取りで歩き始めた。

男が近づいてくるのを見ると彼女は再び前方を向き、先導者らしい落ち着いた足取りで歩き始めた。廊下の天井には白色に輝く電灯がちょうど左右のドアと同じように等間隔に並んでいた。ところでこうした明るい一本道を歩いていたからだろうか、しばらくすると彼は、自分と看護師との距離が一定の間隔を空けたまま一向に縮まらないことに気が付いた。というのも、彼が彼女に近づこうと考えて少し歩調を速めると、彼女は、足取りが変わったようにも見えないのに、まるで彼に押されたかのように彼が進んだのと同じだけ前方にいるのだった。したがって二人の間の距離には結局のところ全く変化が無く、例えば彼がある一つのドアを通過しようとするとき彼女はいつももう一つ先のドアの前にいるといった具合だった。

いくら歩きなれた廊下だとはいえ、こんなに自在に動けるものだろうか。幾度か試したあと、相変わらず同じ角度からの白衣の後ろ姿を眺めながら彼は考えた。右手に書類を持つていたからだろう、彼女の背中に二つのしわが斜めに細い影を作っていた。

男は左右を見回してみた。白いコンクリートの壁に連なる木製のドアはその色合いからみて比較的新しいもののように思われる。上の部分には電灯の光が当たりそこだけ一様に白く反射光が輝いていた。看護師は今向かっている部屋のことを215号室と呼んでいた。ところがこうして見てみると、全てのドアは合わせ鏡に映したかのように同じ形、同じ色を呈したもので、一つ一つのドアをそれぞれ見分けることができるような目印など何処にも見当たらなかった。彼の目には同じ像の羅列としか映らなかった。

もしかすると自分たちは先ほどの場所から全く動いていないのではないだろうか。相も変わらず同じ電灯、同じドアだ。少しも進んだように思えない。それとも同じ場所をぐるぐると回り続けているのだろうか。男はすでに、また待合室に帰ってしまいたいとまで考えるようになってしまっていた。

看護師が歩むたびに、緑色の床の上で足元の影が虫の羽のように鈍色に揺らめいた。彼女は男の不安をよそに変わらぬ調子で歩いていたが、ようやく右側の一つのドアの前で足を止め、そちらへ体を向けると、一呼吸おいてから二回ノックした。

どうぞ、とドアの内側から低くはつきりと声が響いた。看護師は左手を伸ばしドアのノブをつかむと、右にひねってゆっくりと手前に引いた。ドアが開かれるにつれ部屋の中から明かりが漏れ出てくるのが分かった。ドアをほぼ直角までに開くと、左手でノブを握ったまま彼女は黙って男のほうへ顔を向けた。中へ入れと言いたいらしい。ドアが開かれたので廊下の先は彼の位置からはちょうど隠された格好になった。

「ここから先には何があるんですか？」

男は彼女のほうを見つめたまま、意を決して尋ねた。部屋に入る前に聞いておきたい。中に入ってしまったえばこの質問はもうできないように彼には思われた。

「この先ですか？」彼女は首を少しばかり左にひねり背後の廊下を見るような仕草をしたが、すぐに元に戻した。「何もありませんわ。ずっと病室だけですよ」

男は部屋の中へと足を踏み入れた。

部屋に入るやいなや、薬品のものらしい匂いが男の鼻腔をつんと刺した。それはちょうど見えない霧となって辺り一面に漂っているようだった。彼の背後でドアがゆっくりと閉まり、ノブがかちやりと鳴る音が聞こえた。彼女はこれで用済みなのだろう。病室の中には二つのベッドが並び、手前のほうには一人の男が横たわっていたが、もう一方は空だった。二つのベッドの間には、電気スタンドと電話を備え付けた木製の小さな机がちょうど枕の側に置いてあり、その隣の椅子の上に、白衣を着て痩せて骨ばった顔つきの男が足を組んで座っている。彼は男を見ると自分は医師だと名乗って会釈し、手前のベッドの足元に置いてある腰掛けを、彼に座るよう促すかのように右手を伸ばして指し示した。

男は黙って彼の身振りを眺めていた。彼の足元には待合室で見たものと同じような黒い光沢のある革張りの腰掛けが置いてある。男は薬の匂いをもう一度確かめるように深く息をつく顔と顔を上げ、腰掛けの右側に横たわるベッドのほうへ視線を向けた。彼は自分の関心が先ほどからベッドの上の男のほうへ強く引き付けられるのを感じていたのだ。枕の上に横たえられたその顔は血が抜き取られてしまったかのように一面に青白く、不気味な透明度を帯びた皮膚の上に、かすかに開いた唇、小さな黒い鼻腔、閉ざされた瞼が並び、なめらかな額には海藻のようにもつれた黒髪が張り付いている。男はまるで忘れかけていた記憶を呼び覚まそうと試みるかのように強力な集中力に促されながらその顔を見つめていた。それは間違いなく彼自身の顔だった。それも彼と瓜二つの顔、鏡に映された顔といった類似ではなく、まごうことなき彼の顔そのものであるように思われた。一体どうなっているのだろう。男の脳裏に突然、以前見たある夢の記憶が鮮明に浮かび上がってきた。彼は階段を降りていく自分自身の姿を、その背後から眺めている。そしてゆっくりと手を伸ばして彼を階段から突き落とすのだ。つまり、落ちていく自分自身の姿を自分で眺めることになる。だが落ちていく男の精神は一体誰のものなのだろう。これは彼には確かめることなどできないことだ。そして背後に立つ自分の姿も。彼はそのとき何の姿をとっているのだろう。その夢は彼にしてみれば不可解で何ら意味があるようにも思われなかったのだ。が、こうした意識が霧に包まれたような不確定な状況に彼は今直面しているのだ。それは精神と肉体が切り離されたのではないかという不安の形をとって彼の中に現れた。男は急に視線を部屋中に巡らせながら、鏡を探し始めた。自分の姿を確認しなかった。

そのとき、いぶかしげに目を細めて彼を見つめている医師の姿が目に入った。

「どうぞお座りください」

今度は彼は声に出して指示した。男は急き立てられるままに敏速な動きで腰掛けた。

「もしよろしければ教えていただきたいのですが」

はやる思いを抑え込もうともせずに、ベッドのほうに視線を向けたまま、彼は医師に尋ねた。

「この男は一体誰です？ それにどうしてこんなところにいるんですか？」

医師は男の姿を確かめるようにベッドの上に目をやった。そしてそのままじつと黙って、何か物思いにひたっているかのように時々瞬きをした。その様子は、さて何から話したのかと考えあぐねているかのようにも見えた。

「二つ目の質問のほうから先にお答えしましょう」と、彼はようやく口を開いた。

「彼がここに運ばれてきたのは今日、まだ日が明けぬうちのことです。濡れた体に毛布を巻き付けられて、救急車で運ばれてきたのです。意識を失ったまま震えていましたが、それが寒さのせいなのかは分かりません」

「どうしてそんなに濡れていたんですか？」

「川から引き上げられたからです」

「身を投げたのですか？」

「ええ、そうです。何せまだ暗いうちでしたから人通りも少なかったのですが、幸い一つ先の橋の上にあったカップルが見つけてくれましたね。最初は犬か何かが溺れているのかと思ったそうなんです、どうやら人間らしいと分かるとすぐに通報して下さったのです」

「それで彼は一体何者なのですか？」と男は最初の質問を繰り返した。

医師は組んでいた足をほぐくと、彼のほうに向きなおった。

「銀行員ですよ。ちょうど彼が身を投げた川の向こうにある、小さな銀行に勤めていたのです」

「銀行員ですって？」と男は言った。「それで職場の人とは会ったのですか？」

「ええ、今朝早く、彼と同じくらいの年齢の人たち二人と、年配の方が一人、おそらく上司なのでしょう、合わせて三人が彼を訪ねて来ました。三人ともそのまま出勤するつもりなのか、紺のスーツを着て平たいカバンを持っていました。彼に面会したいと彼らは申し入れてきましたが、私は断りました。非常に危険な状態にありますので、面会のご遠慮くださいと私が言うと、彼らは何やらお互いにぶつぶつしゃべり始めました。昨日までの彼は明るく真面目で誰とでも打ち解ける人物だった、客に対する態度も申し分なかった、少なくとも昨日別れたときにはそんな様子はなかった、といったことをまるで餌をもらおうとする雛鳥みたいに私に向かって我先に話しかけてきたものです。」

私はもしかすると彼らなら彼の行動の理由について何か知っているかもしれないと思いました。そこで私は、彼は何か仕事の上で手痛い失敗でもやらかしたのではありませんかと彼らに尋ねてみました。三人は一斉に首を振りました。そんなことはない、あいつは有能な行員だ、仕事でへまなどする奴じゃない、表彰してやりたいくらいだ、取引先の評判も良かった、帳簿をつけ間違えたこともない、EXCELのエクスパートを持っているのはあいつだけだ。彼らは交互にしゃべり続け、一人が何か言う度に、他の二人はうんうん全くその通りだというふうに小刻みに頷くのでした。

それでは女性関係はどうです、と私は尋ねました。最近誰か職場の若い女の子にでも惚れ込んでしまい、無惨にもそっけなく振られてしまったというようなことはありませんでしたか。上司はコマのようにくると背後の二人のほうに振り向きました。二人は慌てて目をばちくりとさせながら、いやいやあいつは浮気なぞしちやいせんよ、大体あいつがそんな奴に見えますか、そうそう、俺たちがたまに仕事帰りに飲みに誘っても、いや女房が待ってるからって、さっさと先に帰っちゃうような奴なんですから、とまるで上司を非難するかのような調子で声をそろえて言ったんです」

「彼には奥さんがいるんですか？」

「ええ、彼がここに運びこまれてからすぐに、連絡を受けてやって来ました。さすがにシヨックで泣き腫らしていたようで、目が少し充血していましたが、ここに来てからは意外に落ち着いた様子で、ベッドのそば、ほら、今あなたが座っている椅子の上で、じつと夫の様子を見つめていました。気丈な女性、という印象を受けましたね」

「そうだったんですか。それで、彼女は彼が死のうとした理由は分かっていたのですか？」

「ええ、彼女には分かっていたのです、それもずっと前から」

「分かっていたですって？ それならどうして止めようとしなかったんです？」

「止めることは出来ないのです」

「どういうことです？」

「私は三人の男たちと別れたのち、この病室へ引き返して来ました。彼女は部屋の前の廊下の壁に黙って寄りかかっていた。私は彼女に話しかけました。いかがですか具合は、とね。思えば馬鹿な質問の仕方でした。これでは彼女のことを尋ねたのかご主人のことを尋ねたのか分からないじゃないですか。彼女は小さく頷きました。もしかすると考え事をしている、こちらの言葉など耳に入っていなかったのかもかもしれません。今ご主人の同僚たちと話してきたところです、と私は言いました。ご主人の行動の原因について彼らに尋ねてみましたよ、成果無しでしたがね。職場では、仕事の面でも人間関係の面でも全く問題無かったようです。」

あの人たちに分かるわけがないわ、と突然彼女が呟きました。どういことです、あな

たには分かっているのですか、と私は問いかけました。

仕事ですって？ 人間関係ですって？ 全く問題ない、ああ、全くその通りだわ。そうよ、あの人は全く問題なく生きてきたのよ、と彼女は言いました。

結婚するずっと前から、まだお互いに学生だったときから、そのことは分かっていたわ。あの頃のあの人の姿、今でも簡単に思い浮かぶの。髪は今より短かったわ。背が高かったから、私と歩くときはいつも少し身をかがめて歩いていたの。薄い青が好きで、よくその色のセーターを着ていたわ。初めて会ったのは高校で同じクラスになったときかしら。だけれどはつきり覚えているわけじゃないの。もっと前に会ってたかもしれない。あの人はあの頃から変わらず良い人だった。これは私にとってだけじゃないの。周りのみんなもそう思っているはずよ。そう、私の父も母も、あの人のことはすごく気に入っていたんだから。大学は別だったけど、週に二、三回は必ず会ってた。今の職場に入ってすぐに結婚したわ。プロポーズしたのはあの人のほうだった。別にもったいぶって言わなくっても、お互いの気持ちは分かっていたんだけど。そして今のアパートで二人で暮らし始めたの。もちろんあの人は良い夫だったわ。仕事の付き合いより家庭を大事にしてくれて、私が一人ぼっちにならないようにいつも気を遣ってくれていたのよ。そうよ、何も問題が無かった。そしてそのことが、あの人を破滅に追い込んでしまったの。

ここまで喋ると彼女は、ため息を一つついて俯きました。彼女の言葉はまるで熱にうなされた病人のそのように支離滅裂でしたが、口調は冷静で落ち着いたものでした。彼女はまるで自分に向かって確かめるように喋っていたのです。その口ぶりには人を強く惹きつけるものがありました。私は彼女に話を続けるよう促しました。

あの人は病に侵されたのよ、と彼女は言いました。病ですか、と私は答えました。ええ、そう。何かが突然、あの人の生活を狂わせてしまったの。最初にそれが分かったのは、あの朝、目が覚めたときのことだった。七時にセットしておいた目覚ましが鳴り響いたの。いつもならあの人が止めるんだけど、あの朝は何時になっても鳴り止まなかったの。私、不思議に思って、枕から頭を上げてあの人のほうを見たの。あの人の目は開いていたわ。真っすぐ上に向かって。食い入るように天井を見つめていたのよ。私、呆然としちゃって、それからあわててあの人のこと揺さぶったの。あの人はとこちらに気づくと、いや何でもないって、さっさとベッドから出て行っちゃった。そうよ、それからなの。毎朝そうなの。あの人がいたら、いつも朝になったら何かぶつぶつ呟いていたり、布団を抱きしめて震えていたり、時にはベッドからいなくなっていて、居間に黙って一人で座ったりしてたの。私、怖くなっちゃって、どうしたの一体、って、あの人に尋ねたわ。あの人は平気なふりして、心配いらないうって言ったけど、私には分かっていたのよ、あの人は病に取りつかれたんだって。あの人の悪夢は夢から覚めたときに始まったのよ。しるしは色々なとこ

ろに表れてた。朝七時に起きること。パンとハムエッグとサラダの朝食を食べること。ソファに腰かけて新聞を読むこと。電車に乗って仕事に出かけること。今まで当たり前の日常だったことが、あの人にとっては耐えられないことになったのよ。切羽詰まったような目つきを始めた。指先でせわしくテーブルを叩くようになったわ。食事の量も減ったの。私が止めたの。だって、鉛を食べてるような表情をするんだから。小さな亀裂だったのかもしれない。でも私にははっきりと分かったの。医者に行くようにも勧めたのよ。でもあの人は断った。医者に治せるもんじゃないってね。今は私もそう思う。あの病はずっと昔、あの人が子どもだったときから、あの人のどこかに潜んでいたのよ。そしてある日突然に、あの人が繰り返し築いて来た安らかな日々小さな傷を入れて、あの人にとっての世界全体をガラスのようにひびいらせてしまったの。あの人に必要だったのは希望だった。それだけがあの人を平凡な日々の病から救い出せたの。でも駄目だった。映画、スポーツ、音楽、演劇。いろいろなものに、あの人を連れ出そうとした。でもあの人は私が示すものに見向きもしなかった。結局そうだったものも、あの人にとっては日常の一部に過ぎなかったのね。お酒も飲まなくなっただけ。もともとあまり飲まない人だったけど、せめて酔いで少しでも忘れてしまえば良かったんだけど。

私、今日あの人が自殺するってこと、なんとなく感じていたの。昨夜別れたときから、そうなるだろうって思ってた。あの人は部屋の中を、黙って歩いてたわ。何か遠くを見るような目つきをして、檻の中のライオンのように小さな部屋の中を行ったり来たりしてたの。どのくらいの時間そうしていたのか分からない。私、部屋の隅で膝を抱えてそれを見ていたの。そしたら突然、部屋の真ん中でくると向きを変えて、挨拶もなしに外に出ていった。私、動けなかったわ。これから何が起こるのか考えるのが怖くて、そのままずっと一晩中動けなかったの。朝になって電話が鳴ったときには、ちょっとびっくりしたけどね。あの人が身を投げたって聞いたときには、正直言ってほっとした。あの人はやっと永遠の安らぎを得るのよ。残念ながら静かな微笑みを浮かべて、臨終のときを待つって具合にはいかなかったけどね。

ねえ先生、お願いだからあの人のこと、そっとしておいて下さらない？ このままあの人を死なせてあげたいの。どうしてこんなことを考えるようになったのか分からないわ。これじゃまるで、私のほうが病にかかっているみたいね。

これだけ言うと、彼女は私に礼を言っただけで帰って行きました。おそらく今頃は、一人寂しく夕食でも食べているのでしょう。しかし、彼女が言ったことは真実です。彼を襲った病は私たちには癒せぬものなのです。それは真綿で首をしめるようにじわじわと人を侵すものなのです。無風の持つ息苦しさです。大抵の人間はその存在に気が付くことすらありません。人々は動機を探します。一体、何が彼をして死に向かわしめたのか？ しかし実は

動機がないことこそ動機なのです。それがこの病の恐ろしい点です。この男の場合もそうなのです。彼の気づかぬうちに、ずっと昔から、彼は確実に侵され続けてきたのです。それが彼のこのような行動をとらせた源流なのです」

医師はここまで話すと口をつぐみ、男のほうをじっと見つめた。

男はベッドの上の男を見ていた。まだかすかながら息はあるようだ。だが放っておけばいずれ事切れるだろう。男に起こった感情は、単なる同情心だったのだろうか？ 彼は医師のほうに向きなおると言った。

「あなたは彼の命を救おうとは思わないのですか？」

医師のそれとは対照的にかん高い声だった。医師は眉をぴくりと上げた。

「あなたは医者でしょう？ 彼の命を救うことはまだ可能はずだ。酸素を吸わせるなり、点滴を打つなり、やることがあるでしょう。精神の病が癒せぬことを理由に、あなたは人命を救うという医者としての使命を怠るつもりなんですか？」

「別に怠るつもりはありませんがね」と医師は答えた。「なるほど彼の命を救うことは可能かもしれませんが。しかしたどえそうして彼をまた元の世界に戻したとして、彼はうまくやって行けるのでしょうか？ 私はこのことに関しては極めて悲観的な意見を持っています。彼の妻も彼の死を望みました。彼を元の世界に戻すこと、これは彼にとっても周囲の人間にとっても残酷な行為だと私には思われるのです。」

いやしかし、もしかすると彼が皆の下で再び以前の光に満ちた快活さを取り戻す可能性も無いとはいえないかもしれません。家庭でも職場でも、何の障害も感じずに暮らして行けるようになるまで、彼が回復しないとは限りません。しかしですね、私たち自身がすでにそうした希望を失っているのです。私たち医師こそ、実は最も大きな無常観に取りつかれているのかもしれませんが。あなたはこの部屋に来るときに、延々と続くドアを見なかったのですか？ 病室は一つではないのです。彼のような人間はどこにでもいるのです。重度にせよ軽度になせよ。私たちはささやかな希望を持つには余りに現実を知りすぎてしまった。彼らの中に見えるのです、死神の鎌よりも残酷な病が、重苦しい霧となって漂う姿が。もはや私たちにできることは、傍観者としての立場をとることだけなのです」

男は立ち上がった。そして頭を傾け、ベッドの上に横たわる自分の姿に、静かで感情のこもらない眼差しを投げかけた。それはもはや一個の人形のように生氣無く彼の目に映った。そうした男を見つめる医師の目には、哀れみとも言えなくない気配が見て取れた。

男は突然、軽い眩暈を起こしたかのように、危うい足取りで後ろのほうによるめいた。右手でノブを掴んでドアを開け、部屋の外へと出た。

男は廊下を歩いていた。その足取りには敏捷ではないが落ち着いた正確さが感じられる。

というのも、以前この廊下を歩いたときと違い、一步一步を踏むたび、前進していることを彼は感じる事ができたのだ。これは彼にしてみれば大きな励ましとなり、同時に、今まで彼の内部で鬱積していた不可解な重い空気が晴れ上がって行くのがはつきりと分かった。

男は足を止めると背後を振り返った。そこに彼が見たのは、無数のドアが連なる単調で平坦な長い通路に過ぎなかった。彼が出て来たドアを見つけることははや不可能だった。そして待合室も。待合室は彼の後方にあるはずだったが、そこに戻りたいという気持ちはとうに失せていた。

男が視線を前方に戻したその時、今まで何も無かった廊下の遥か先のほうに、漆黒の闇が大きく口を広げ始める姿が見えた。その触手のように蠢く姿、甘美な抱擁を思わせる姿が、彼にとつてただ一つの救いであることははや疑いようのないことだった。男は一度深い息をつく、その長い彷徨の果てへとゆっくりと踏み出した。

宮城保之

みやぎ やすゆき

1972年福岡県行橋市生まれ。
立教大学文学部、東京都立大学大学院修士課程修了後、オーストリア政府給費奨学生としてウィーン大学哲学科へ留学。
2011年同地で東日本大震災支援チャリティーイベント”Japan: Dancing to Support”を主催。
ウィーン市民大学（VHS）にて日本語教師、難民支援ウテ・ボックにてボランティアドイツ語教師を務めた後に帰国、山口県の日本語学校教員となる。
奥田知志牧師の活動に惹かれ東八幡キリスト教会に加入。
All About「ドイツ語」ガイド。
2024年、『ウィーンで受け継いだ志』で第22回下田歌子賞エッセイの部（一般の部）佳作。
2025年、自伝的小説『異邦人』を公表。サクラ国際合唱団副代表。